様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５２０２７８
研究課題名（和文）　１９４０年代・５０年代におけるフランス知識人の「全体主義」思想への係わり
研究課題名（英文）　The French Intellectuals' Attitudes fowards Totalitrianism in the 1940s and 1950s

研究代表者
川神　傳弘（KAWAKAMI MORIHIRO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：００１３１４１７

研究成果の概要:1940 年代後半からスターリン治下のソヴィエト連邦共産主義体制内での恐怖政治の実態報告がフランスに伝わった。密告・強制収容所送り・暴力・拷問・虐殺などの全体主義体制の悲惨な実情が明るみに出て、それまでナチス・ドイツとは 180 度異なる理想の国家実現の夢をソ連に託していたフランス知識人を幻滅させ、共産主義支持の知識人から反―共産主義に転向する人々が続出した。しかしジャン―ポール・サルトルは一貫してソ連擁護の姿勢を崩すことはなかった。理想の未来実現のために人命の犠牲はやむを得ないことを認めたのである。アルベール・カミュはあくまで人命尊重の立場をとり、サルトルと訣別した。
彼ら両者がかく対蹠的な立場を表明した裏側に何が秘められているのかを詳細に分析した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ語系文学
キーワード：サルトル、カミュ、全体主義、共産主義、transcendance(超越)、hic et nunc (ここ・今)

１．研究開始当初の背景

J.-P.サルトルが第二次大戦後、思想的に共産主義と共同歩調をとったことはつとに知られた事実である。例えばソヴィエト連邦が戦後その衛星国に侵略を繰り返すたびに、サルトルは概ねソ連擁護の論陣を張り、一貫してその態度を崩すことはなかった。

フランスでは既に 1950 年代初頭より、ガストン・フェッサールやレイモン・アロンらが、スターリン治下のソ連における全体主義

体制と、強制収容所の存在に象徴される恐怖政治の過酷な惨状に疑問を投げかける意見を様々な著書や評論を通して発表したが、サルトルは 1962 年ソ連の作家ソルジェニーツインによる『イワン・デニーソヴィッチの一日』が世に出るまで、自らのソ連共産主義体制擁護の姿勢を一貫して堅持し続けた。

サルトル、アロン、フェッサール、メルロ＝ポンティらは、実は超マルクス主義的ヘーゲル主義者アレクサンドル・コジェーヴが 1933~39 年にかけて Hautes Etudes で行ったヘーゲルの『精神現象学』講義の生徒であった。その後彼らの内、サルトルとメルロ＝ポンティは師の敷いた革命的ヒューマニズムの路線をそのまま歩み続けたが、アロンとフェッサールはソヴィエトの一党独裁の全体主義体制を批判する方向に立場を変えた。

元来彼らはいずれも博愛主義的人道主義者であり、密告・強制収容所送り・暴力・拷問・虐殺（一説によると 6000 万人が強制収容所に抑留され、2000 万人殺された）を容認する恐怖政治の全体主義体制を支持する筈のない知識人であった。しかしながら“ブルジョワ嫌悪”の体質を持つサルトルは『スターリンの亡霊』で、スターリン主義の硬直化した官僚主義を批判しつつも、そのあり方はあくまで未来の《均質的で普遍的な国家》という理想を実現するための歴史的な le détour 迂回であるとして、恐怖政治を容認し続けたのである。

こうしたサルトルの《希望の供給者》的なあり方は、特にサルトル研究者に支持された。政治的発言に最小限求められるべきは、現実世界のあるがままの姿であり、事実の調査を重視する作業こそがその第一歩であるにも拘わらず、未来の理想国家実現の観念が人命の軽視を招く結果となって表れたものと言えよう。わが国のサルトル研究者たちも同様であった。彼らに共通するのは“マニ教的善悪二元論”であり、一旦この罠に嵌った人々は現実よりも理想を優先する傾向に奔ると言える。

２．研究の目的

上記の背景に記したように、博愛的人道主義の選良である知識人が、何ゆえ暴力と強制収容所の存在を許す恐怖政治による全体主義体制を擁護するのであろうか？端的に言って以上が当研究の目的である。

まことに不思議なことだが、この二百年西欧諸国は大多数によって選択された道・民主主義の道に踏み入れてきたのだが、最も見識ある人と看做される知識人はむしろ粗暴で専制的な体制を選んできた経緯がある。近年ハイデッガーやその崇拝者、またその弟子たちの事例に注目が集まったが、彼らは第二次大戦前また大戦中ナチズムの思想に固着した人々であった。また戦後フランスの数多の最高級の知識人達が身も心も捧げた対象は、政治的な意味合いにおけるマルクス主義の変異体・ヴァリアントであった。すなわち、スターリン主義・トロツキー主義・毛沢東主義・カストロ主義、あるいは一時的であったにせよミシェル・フーコーが支持したホメイニの体制であった。右翼・左翼の違いがあるにもせよ、これらの体制は複数政党の存立を許容しない一党独裁の全体主義体制なのである。どうしてこのような結果になるのか。

謎解きのヒントの一つを例えばツヴェタン・トドロフはジョージ・オーウェルの言に求めている。1940 年代大戦前夜のイギリスにおいて、一般市民は自由を愛し、善悪の実在を信じ、知性を尊重したが、知識人は《形而上学的虚構》の仮面を剥ぐことに汲汲とした結果、ファシズムやスターリニズムに迎合的な態度をとってしまったとオーウェルは語っている。

知識人は一般人より精神的領域で天分に恵まれているがゆえに、知的能力の分野で権力の座に到達しようとするからである。このような目的に対しては専制政治のほうが民主主義以上に好都合なのである。

《必要不可欠な殺人》を称賛する人々とは、間近に死体を見たことのない人でもある。1930 年代のマルクス主義の詩人オーデンがそうであったように、彼らの詩作品は、殺人がなによりもまず言葉でしかありえない人間によってしか書かれ得ないものなのである。

要するに、理想優先による人命軽視の傾向は《知識人や作家、また芸術家などが倫理の領域や政治の領域に美的な判断基準を体系的に適用し始めたこと＝想像力の支配》に原因があるようだ。つまり政治・倫理の領域への想像力の君臨が問題となる。ポール・ベニシューはこれを“ロマン主義的信仰箇条”と称しているが、詩人のロマン主義的世界観には否応なく“絶対善”“絶対悪”の観念が忍び込み、民主主義的現実世界が“次善”のような妥協で成立していることは忘れ去られるのである。詩人の念頭には Utopisme・理想郷主義が付き纏う。当時のサルトルにも理想郷主義がなかったかどうかを詳らかにする。

３．研究の方法

全体主義思想に対する態度として、サルトルとカミュの立場のとり方は際立って対蹠的である。そこで、最終的に彼ら二者の見解を比較することで全体主義思想を鮮明に浮

かび上がらせる方法を採用した。彼らの人間観を一言で表現すれば、transcendance[超越]と hic et nunc〔ここ・今〕である。

両者のソヴィエト連邦に象徴される全体主義体制に関する取り組み方の相違は、作家個人の生まれ育った環境、生い立ち、学歴、病歴など様々な要因からなる人間観、人生観、社会観あるいは、人生観全体を根底から支える精神の骨組みと土台を隈なく照射する作業によって明らかになることであろう。

16 世紀フランスのフランソワ・ラブレーに代表されるユマニストたちは“文は人なり”という言葉を遺した。人となりや人生観は文・テクストに表れるのである。この言を信じて採用すべき方法はサルトル・カミュの小説・思想・評論等に窺えるテクストの比較であろう。Intertextualité・相互的テクスト間移動の往復運動のはざ間に双方のものの見方の違いを見出す方法である。その結果収斂され、純粋化された形式的なタームが、サルトルの transcendance「超越」の思想と、カミュの hic et nunc「ここ・今」の考え方であった。かくして、サルトルとカミュの小説、思想、評論等のテクストから、特に両者の自然観、人間観に窺える夫々の特徴を比較する作業に徹した。

４．研究成果

サルトルとカミュの自然観と人間観の相違から、彼らの一方が communisme を擁護し、他方が anti-communisme に奔った理由について一定の成果を得ることが出来た。

1940 年代・50 年代におけるフランス知識人の「全体主義思想」への関わり方の違いが鮮明な形で表出した出来事がある。1950 年代初頭の「サルトル・カミュ論争」の勃発である。それぞれ実存主義の旗手として華々しい文壇デビューを果たし、世界中から注目を集める成果を上げ、ノーベル文学賞の候補者となった（カミュは受賞し、サルトルは拒否した）二人の知識人は双方ともにヒューマニズムを標榜する仲の良い左翼の文人同士と見られていた。

しかしながら、出会いから互いに協力関係を築きながらも、両者の人間観・世界観には徐々に隔たりが生じてくるのである。実はその関係瓦解の萌芽は彼らの処女作とも言える代表的作品『嘔吐』と『異邦人』に明瞭に見て取れるのだが、論争以前は誰もその事実に気付かなかったのである。

サルトルの哲学的代表作『存在と無』に託されたテーマは人間存在のあり方である。彼は人間存在のあり方を「即自（モノ）－対自（意識）」の総合体と規定し、さらに即自存在の発現過程を小説『嘔吐』で不気味な存在として表現した。《嘔吐》とは道具存在的なあり方を喪失したモノ＝意味が剥がれた物質が引き起こす反応であるが、サルトルはそれを極端な糞弁論的記述で表現した。自然を含めて、彼にはモノに対する旺盛な嫌悪があるといえる。いわば自然嫌悪・忌避の姿勢である。

対してカミュの作品『異邦人』をみずみずしく彩るものは自然への賛歌である。カミュには《大地への同意》と physis・自然を肯定する姿勢がある。作品の主人公の生き方を見る限り、カミュは大地を、自然を、世界を、さらには「現世」を愛し享受する姿勢に溢れている。言い換えれば、彼は現実世界の肯定者として、あの世（彼岸）や希望的未来を信じないのである。したがってその主人公は刹那的な人間と見まごうばかりの様子に描かれている。

一方サルトルは人間存在の価値を対自存在（意識）のあり方に認める。意識は未来の目標に向かって自己投棄を繰り返し、自己を超越することを宿命付けられている。その前提は、今ある自分を否定してより良い自分になること、いわば現状の否定である。サルトルの思想はヘーゲル同様 Négativité・否定性を踏み台にする跳躍の思想である。常に現在に不満を抱きながら理想の未来を志向する transcendance・超越こそがサルトルの思想である。1950 年代当時のサルトルの理想の未来は、均質的で普遍的な国家実現を目指すプロレタリア革命思想にあった。

カミュは、キリスト教の千年王国説とトマス・モアのユートピアに由来する共産主義革命は神話でしかないと考える現実主義者である。『異邦人』の主人公ムルソーの行き方が遍く提示しているように、カミュは《ここ》と《今》に意味を見出す人なのである。未来の理想国家実現のためという口実で、人命を奪っていいものではないと考えるのである。

結局、進歩史観の未来派と現実肯定派の争いということになるが、ここには他にも「論理の整合性は万能ではない」という、パスカル以来の合理主義一辺倒に対する批判という極めて重要な問題も内包されていることを付け加えておきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　　件）

① 川神傅弘　サルトルと全体主義　―預言者サルトル―　関西大学フランス語フランス文学会機関誌　仏語仏文学第 34 号

pp.23～37. 2008 年 3 月 15 日発行
査読有り

② 川神傅弘　J.-P.Sartre と A.Camus　―transcendance vs　hic et nunc―　関西大学フランス語フランス文学会機関誌　仏語仏文学第 35 号
pp.33～59．　2009 年 3 月 15 日発行
査読有り

６．研究組織
(1)研究代表者
　川神　傅弘　(KAWAKAMI MORIHIRO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：００１３１４１７